

P1-023

幼児の身体模倣の発達の追跡調査

田中 駿¹⁾、大谷 多加志²⁾、大久保 圭子³⁾、落合 利佳⁴⁾、牛山 道雄⁵⁾、郷間 英世⁶⁾、石倉 健二⁷⁾

兵庫教育大学大学院¹⁾、
京都国際社会福祉センター²⁾、
赤穂特別支援学校³⁾、
京都女子大学⁴⁾、
京都教育大学⁵⁾、
姫路大学⁶⁾、
兵庫教育大学⁷⁾

【目的】 幼児期における身体模倣は、他者とのコミュニケーションの礎となり、仲間関係を深めていく上で必要な力である。また、発達障害児は健常児と比較して、身体模倣が苦手という報告があり、身体模倣の発達を確認することは重要であると考えられる。そこで、本研究では幼児に身体模倣課題を実施し、3歳児、4歳児、5歳児と追跡調査を行い、身体模倣能力の発達の経過を明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象は3歳児、4歳児、5歳児において身体模倣課題を実施した男児15名、女児22名の計37名である。実施時期は初回（3歳児）から約12ヶ月おきとした。身体模倣課題は「性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度」の動作模倣課題の項目を使用した。全13項目であり、腕が正中線を交差しない課題が3項目、腕が正中線を交差する課題が6項目、手指の課題が4項目である。合計点数が高いほど、身体模倣能力が高いと判断できる。本研究は身体模倣得点の伸びとそれぞれの年齢との関連を検討した。本研究は京都教育大学倫理委員会の承認、および対象児の保護者の同意を得て行っている。

【結果】 3歳児の得点は、合計 2.35 ± 2.88 （平均±標準偏差）、交差なし 0.41 ± 0.64 、交差あり 1.27 ± 1.56 、手指 0.68 ± 0.97 であった。4歳児の得点は、合計 6.08 ± 3.24 、交差なし 1.43 ± 0.99 、交差あり 3.22 ± 2.07 、手指 1.43 ± 0.93 であった。5歳児の得点は、合計 7.65 ± 2.46 、交差なし 1.92 ± 0.83 、交差あり 4.05 ± 1.51 、手指 1.68 ± 0.75 であった。身体模倣の種類ごとに Friedman 検定をしたところ、年齢間に有意差が認められた。また、それぞれの相関を求めたところ、3歳児はそれぞれの身体模倣の種類同士で有意な相関が認められたが、学年を超えての相関は認められなかった。4歳児も交差なしと手指の課題以外は課題同士で有意な相関が認められ、合計と交差あり課題は5歳児の課題すべてと、交差なし課題は合計、交差なし課題、交差あり課題と、手指は交差あり課題と有意な正の相関が認められた。

【考察】 学年が上がるにしたがって得点が増加しており、身体模倣は幼児期に獲得されることが考えられた。また、学年間で身体模倣得点の相関が認められたのは、4歳児と5歳児であった。このことから、3歳児は身体模倣能力の得意不得意の差がまだはっきりとしておらず、獲得の個人差があまり大きくないが、4歳児から5歳児にかけては身体模倣能力の発達の個人差があらわれると考えられた。